

すべての民に

詩 編 68:33~36

マタイ 28:16~20

今朗読しました詩編 68 編は、イスラエルだけではなく、地のすべての国々が神をほめたたえますように、という讃歌です。何かの祝祭か、勝利を祝い時に歌われたのではないかという話もあります。いにしえよりの高い天を駆って進む方、口語訳には「いにしえからの天の天に乗られる」と書かれています。宇宙的な広がりをもって、この地上を越えた支配者である神の権威と力を示しています。聖なるところにおられる、まさに恐るべき神は、選ばれた民に力と権威を賜る方です。その神をたたえよ、と詩篇記者は呼びかけています。 私たちが信じている神様は、この世の、また天のすべてをお造りになり、支配しておられる方です。イスラエルは国を失い、すべてが終わったような状況の中でも、神様の力によって生かされた歴史を振り返ってみながら、神を讃美しているのです。

この世の支配者である神様は、私たちのために独り子イエスをこの世に送ってくださいました。そして、私たちを救うために、私たちの罪を背負って十字架で死んでくださったイエスを甦らせました。私たちの救い主イエスは死に打ち勝って復活なされたのです。

そして、父なる神のもとに帰られるときとなりました。十一人の弟子たちは、(イエス様を裏切ったイスカリオテのユダは自ら命を絶ってここにはいませんが)、イエス様が「わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く」(マタイ 26・32)とおっしゃったこと、そして、復活なされた主イエスが婦人たちに「・・・行って兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこで私に会うことになる。」(28・10)とおっしゃったことを覚えて、ガリラヤにある山に登ります。

そこで、復活なされた主イエスに会います。聖書には、弟子たちが「イエスに会い、ひれ伏した」と書かれています。ひれ伏したという言葉は、王様の前で、あるいはギリシア人が神々の前で、床や地、その足や衣服の裾に口づけをしたという言葉で、恭しく拝する、崇拜、礼拝する、という意味があります。復活なされたイエス様への最大の敬意を表す模様です。しかし、それでありながらも疑う者がいたと、聖書は語っています。確かに死んだ人が復活したという事実を信じることができない、人間の心固さが表れています。

3年間寝食を共にしていたイエス様が目の前におられるのに疑う者もいた。「疑う者」が複数形になっているのを見ると、一人、二人ではなかったということです。今、何が起こっているのかわからない、戸惑い、困惑している弟子たちの姿です。夢の中にいるのか、現実なのか、理解できないことの前で、ひれ伏しながらも心はいろいろな思いで騒いでいたかもしれません。

そのような弟子たちに復活なされたイエス様は近寄って来て言われました。「私は天と地の一切の権能を授かっている。だからすべての民を私の弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を受け、あなた方に命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいる。」

創造者の力を持っておられる主は天に昇られる前に、遺言のように、弟子たちに命じておられるのです。すべての民を私の弟子にしなさい。口語訳には「あなたがたは行って、すべての国民を弟子として」と訳されています。すべての民の所へ行って弟子にしなさい、それは父と子と聖霊の

名によって、つまり三位一体によってバプテスマ、洗礼を受け、主から命じられたことを守るよう教えることです。それを守る者に約束が与えられます。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」インマヌエルの神様の力が与えられるのです。

私は 1999 年東京神学大学院を修了し、在日大韓基督教会の教会に派遣されることになりましたが、その前に、私が韓国で伝道師として働いていた教会の先生が韓国の長老神学大学で行われる宣教師訓練センターの委員をなさる関係で、勧められ、結構人選が難しいところでしたが、その先生のお陰で3ヶ月くらいの宣教師派遣のための訓練コースに参加することができました。

中国、モンゴル、ラオス、インドネシア、カンボジア、パキスタンなど、そしてアフリカの聞いたこともない名前の国に行く宣教師夫婦14カップル28名と私一人で29人でした。朝6時の早天祈祷会から始まり、6時の夕食前の日課が終ると、夕食後交わりの時間をもちますが、毎日与えられたレポートに追われ、夜遅くまで大変な日々でした。なぜ宣教師として他国に行こうとするのかを問われつつ、聖書を学び、派遣される国に対する言語や情報、宣教師の健康、注意点、家庭生活に至るまで細かい講義がなされ、また、ディスカッションが行われました。実際に宣教師として働いておられた方々との話し合いの時間もありました。同じ志を持っている集まりで、とても励まされ、また、楽しかったです。大抵の方が牧師として働いておられた方でしたので、久しぶりに学生に帰った気分のように、活気あふれる雰囲気でした。しかし、その訓練が終る日が近づくにつれて緊張感が走りました。丁度、そのとき、ロシアにいた韓国人宣教師が強盗に襲われ、亡くなったという知らせが届きました。カンボジアには内乱が終った当時もあっちこちに地雷が埋められ、手足を失っている子供が多いという話もありました。中国やイスラム圏での厳しい情報も十分聞いたところでした。

私は留学生活で住み慣れている日本に戻ることで、アジアの中でも住みやすい国ですし、8年間もいたところだったので、かえって日本が自分の居場所のように思われ、早く戻って仕事をしたいという気持ちでしたが、しかし、幼い子供まで連れて治安や情勢が不安定な、慣れてない国にいかなければならない宣教師たちの緊張感が現れ始めたのです。最終の日曜日はある教会で派遣の礼拝をしていただきましたが、私たち、宣教師たちが講壇の前で讃美歌を歌っていた時に、教会員の何人かが啜り泣きをするのが見えました。命賭けで国を出て行こうとする宣教師たちを前にして祈りながら、いろいろな思いが交差したと思われまます。

彼らはなぜ、宣教師になろうとするのでしょうか。まさに、今日読み上げました主イエスの命令があるからです。私たちは時間があるごとに集まり、なぜ牧師になったのか、なぜ宣教師を志望したのか、それぞれ証のような言葉を交わし、共に祈りました。私たちのために死んで下さった主イエスに対する愛、そして、その主が共におられるという約束を信じて、深い平安、揺らぎない平和を得ることができました。

私たちと共におられる方がいる。死に打ち勝ち、天と地の一切の権能を持っておられる方です。その方が私たちと共におられる。私は弱い、しかし、その弱さを主が知っておられる、私の歩もうとしている道に何が起こるかも知らない、しかし、天と地をお造りになり、すべてを支配しておられる、一切の権能を授かっておられる方が共におられる。ですから、死の陰の谷を行くときもわたしたちは災いを恐れないのです。主イエスが共にいてくださる。主のむち、主の杖、それが私たちを力つけてくださるからです。

たぶん、教育もろくに受けていない。身分も地位もないともいえる。イエス様を指してガリラヤ

から何の良いものが出るかと言った人がいるのを見ると、ガリラヤ出身が多かった弟子たちは人々に差別の対象になっていたかもしれません。そのような弟子たちが自分の民族だけではなく、他の民族へ、特に支配者であるローマの人々を前にして福音を語らなければならない、すべての民を主イエスの弟子にしなければならない、主イエスの命令は人間的には不可能なことのよう思われたかもしれません。

しかし、イエス様を三度も知らないと言ったペトロは、聖霊に満たされ、ユダヤの人々の前で声を張り上げて、ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方なのにあなたがたが十字架につけて殺してしまったと大胆に語りました。(使徒言行録2:14) 神はそのイエスを復活させられた、わたしたちは皆、そのことの証人ですと他の弟子と共に大勢の人々の前で説教をしたのです。人々はこれを聞いて、わたしたちはどうしたらよいのですかと問い、その人たちにペトロはイエス・キリストの名によって洗礼を受けるよう、そうすれば罪が赦されることを告げました。まさに、復活なさったイエス様が最後に命令した、父と子と聖霊の名によって洗礼を受け、あなた方に命じておいたことをすべて守るように教えなさい、とおっしゃったその言葉を守っているのです。命を掛けて大胆に語った使徒たちによって福音は広がっていきました。それから、激しい迫害が始まったのです。しかし、今も屈することなく、多くの宣教師たちが世界各地で主の命令に従い、福音を宣べ伝えているのです。

今、私たちはコロナのことで、礼拝も休止し、お互いに会うことも、他の地域に行くことも制限されています。しかし、これは一時的なことで、私たちは主がおっしゃった、この命令を忘れてはならないのです。すべての民に開かれている福音、そして、弟子たちのように、宣教師たちのように他国に直接行くことができなくても、祈り、またいろいろな形で支えることを止まない、それは主の命令であり、私たちに与えられた使命であるからです。

そして、私たちは他人に移してはならないということで、今は他の人になるべく接しないように注意をしていますが、これも一時的なことで、私たちの命が優先ではない、私たちは死んでも生きる信仰によって生かされていること、そして、死んだ者も甦らせる、神様の力の下にいることをより心に留めていきたいものです。

命を懸けて主に従った弟子たちによって、私たちもこのように救われました。そして私たちにもすべての民に福音を伝える使命が与えられているのです。命よりも大事な使命があることを深く考えていきたいと思えます。

どうか、インマヌエルの主が私たちを憐れみ、支え導いてくださいますように。